

温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(64) 平成15年2月1日

中国の歴史書(その2)

『漢書』(K083/58)

『漢書』は、後漢の班固(西暦32~92)により書かれた歴史書です。最初父の班彪が『史記』に続く歴史書を個人的に書き始め、それを息子の班固が受け継ぎ、途中獄につながれるなどの中断の後、明帝の勅命による官選史書として西暦80年頃に一応の完成を見ます。班固の獄死後、さらに和帝は妹の班昭(曹大家)に「表」と「天文志」を補わせることにし、班氏と同郷で数学が得意であった馬続がこれを助け、今日見る形になりました。『史記』を書いた司馬遷の人生にもドラマがありました(司馬遷は宮刑に処せられ、宦官となりました。中島敦『李陵』にその事情が書かれています)。班氏一族もまた起伏の激しい人生でした。班固の末弟班超(西暦33~103)も西域支配を成し遂げた武将として、またローマ帝国との直接交通のため使者を西方に派遣した人として知られています。

さて、その『漢書』は、通史であった『史記』とは異なり、前漢(西漢ともいう。西暦紀元前202~紀元8)一代のみを扱っています。このようにある時代だけを扱うものを“断代史”といいます。構成は『史記』のスタイルを踏襲し、紀伝体で「本紀」12巻、「表」8巻、「志」10巻、「列伝」70巻からなっています。『史記』に対し「世家」はなく、「書」は「志」に改められています。この『漢書』の成立により、紀伝体で書かれた断代史という正史のスタイルは確立したといえます。

『漢書』の中で特に「藝文志」は、書籍目録の元祖ともいべきもので、著者596人・13269巻が6部門に分類され採録されています。また、巻28下・地理志・燕地条に「楽浪海中有倭人分為百余国以歳時来献見云」とあり、わずか19字ながらこれが日本に関する最古の記録です。

『漢書』は、必ずしも儒教的とはいえない『史記』に対する批判として書かれました。司馬遷は董仲舒に儒教を習っていたのですが、当時の中国はいまだ儒教が絶対化される以前の時代であったため、『史記』には儒教的ではない部分があるのです。これに対し司馬遷の時代から約170年たった班固の時には既に儒教の国教化は確立されていました。また班固自身が儒学者でした。ともかく後世において、儒教的観点からは『漢書』のほうがずっと高い評価を受けており、『史記』よりも『漢書』のほうがよく読まれていました。

当館所蔵の『漢書』は、全17冊の和綴じ本で、1876(明治9)年開校の沼津中学校の蔵書印が押されています。中を見ると、朱筆で返り点が打ってあったり本文を手書きしてあったり、様々な書き込みが見られます。当館には他に清の乾隆55(1790)年頃出版されたと思われる『前漢書』(K083/82)も所蔵しています。

(参考文献)

『漢書 卷二十八下 地理志 燕地条』

『史記学50年』 池田英雄(222.01/159)

『漢書』小竹武夫訳(222.01/122)

『漢書列伝選』三木克巳訳(222.04/149)